日本医史学雑誌　第56巻第4号（2010）　527–538

橋田邦彦研究
――ある「葬られた思想家」の生涯と思想[1)]――

勝井　恵子

東京大学 大学院教育学研究科／北里大学 東洋医学総合研究所[2)]

受付：平成22年6月7日／受理：平成22年7月9日

要旨：「葬られた思想家」と称される橋田邦彦は，1882年鳥取に誕生し，幼いころから漢方医である父・藤田謙造の教育により，東洋思想の素養を身につけていた．東京帝国大学医学部の教員として自身の生理学研究に尽力する橋田は，そのかたわらで，「生とは何か」という問いに応答すべく，道元研究にも打ち込み，独自の科学論を展開させた．1940–43年には第56代文部大臣を務めたものの，戦時下の教育行政の責任者として，終戦後に橋田は戦犯に指名され，自決を遂げる．

橋田については，従来の研究において彼の多様な側面が個々に主題化されてきた．しかし，彼の全体像にかんしては等閑視され，未だ明らかとなっていない．そのような状況に鑑み，橋田の思想の全容を解明するという目標のもと，本稿では今まで取り上げられてこなかった彼の側面，すなわち「医」の思想家としての橋田に着目する．

橋田は生涯をつうじて『伝習録』や『傷寒論』といったテクストを精読し，「医」にかんする豊かな論考を残している．そして，「日本医学の樹立」という目標の達成に向け，自身の「医」の思想の社会実践化を図ろうとした．これらのことは，「医」の思想家としての橋田について論究することが，橋田思想の全容を，その形成過程をも議論の俎上に載せながら解明するうえで不可欠な作業であるということの証左となる．したがって，本稿は橋田邦彦研究を継続的に発展させていくための予備的考察として位置づけられる．

キーワード：橋田邦彦，「医」の思想，日本医学，漢方医学

「葬られた思想家」[3)]――こう称されるのは，本研究の主題となる橋田邦彦（1882–1945）である．

Ⅰ：「葬られた思想家」とその生涯

まずは，橋田邦彦という人物の生涯について簡単に振り返ってみることにしよう．ある思想家への解釈を試みるにあたり，必ずしもその者の生涯にふれる必要はないかもしれない．しかし，橋田にかんする先行研究において，その思想の形成過程をも議論の俎上に載せるべきであるとする指摘があること[4)]，また，その思想には，明治・大正・昭和という時を，時代の荒波に翻弄されながら生きた彼自身の体験が深く刻まれていることを踏まえれば，この「葬られた思想家」の個人史に目を向けることは，「思想家としての橋田邦彦」をふたたび呼び覚まし，考察するための不可欠な作業であるといえよう．

1882（明治15）年3月15日，鳥取県倉吉町に，藤田謙造（1845–1903）[5)]の次男として藤田邦彦は誕生した．謙造は浅田宗伯門下の漢方医であり，温知堂鳥取分社を設立するなど漢方存続運動にも深く関与していたが，邦彦が生まれた翌年の10月，医術開業試験規則及医師免許規則が布告され，漢方医学は衰退の一途を辿ることとなる．決して裕福でない生活のなかでも，謙造は「清貧」という言葉を掲げ，その務めを果たしていた．そのような背中を見て育った邦彦は「祖父や父が貧

乏生活をしながら，いつもにこにこしているのを見ていたことは，難しい事を教えられるよりもよかった」[6] と述懐している．邦彦は，実兄である藤田敏彦（1877–1965）[7] とともに幼少期より漢学や陽明学を謙造から学び，東洋思想の素養を身につけていくのである．

小学校を経て中学へと進学した邦彦は，常に主席を保つほどの優秀ぶりであったとされるが，経済的理由から，次男である邦彦の学業は中学までとの考えを謙造は示していたという．すると，これにたいして邦彦は「朝に道をきけば夕べに死すとも可なり」と進学を熱望，その結果，1899年に，当時鳥取県東佐郡で医業を営み，跡取りを探していた橋田浦蔵のもとに養子として迎えられることとなった．ここに「橋田邦彦」が誕生するのである．

1901年に上京し，第一高等学校三部を経て1904年に東京帝国大学医科大学へ入学，1908年に卒業を迎えた橋田は，当然，養父との約束を果たすべく臨床医になるはずであった．しかし，彼が志したのは生理学研究であり，大沢謙二（1851–1927）に師事，1909年に東大助手となり，生理学者としての道を歩み始めることとなる．それからしばらく経済的に非常に苦しい日々を送っていたが，この背景には，助手になった翌年の1910年，養家である橋田家が鳥取で開業していた医院を経営不振で閉鎖し，上京してきた一家全員を橋田1人が助手の薄給のみで養わねばならなくなったという事情があったといわれている．そのような橋田のもとに，生理学研究のための渡欧の機会がようやく巡ってきたのは1914年のことで，ストラスブルク大学のギルデマイステル（Gildemeister）のもとで，刺激生理学の研究に取り組むようになる．しかし，渡欧直後に待ち受けていたのは第一次世界大戦勃発であり，ドイツでの研究生活から一転，エスリンゲンの収容所にて捕虜生活を送ることとなる．研究論文の没収といった研究面にとどまらず，心身ともに大きな痛手を橋田は負ってしまうものの，約70日後には解放され，その後はチューリッヒ大学へ移り，今度はツァンゲル（Zangger）のもとで研究を再開，蛙皮の電気生理学研究に従事し[8]，1918年に帰国の途についた．

帰国後は東大の助教授に就任，生理学第二講座を担当することとなるのであるが，この頃，教員として教壇に立つことになった橋田は，ある1つの問題意識を抱えるようになる．

「初めの頃は生理学をやるといふので専門的な研究に従事して居ったのでありましたが，その内に生理学の講義を始めなければならないことになって来ましたので，さて講義を始めやうとしますと，生理学といふものは何であるかといふことを一応考へてみなければならなくなりました．［……］結局吾々が生きて居るといふことは抑々何かと云ふことが問題になって来たのであります．［……］教壇に立って学生に生命に関係のある問題を講釈する者が生命といふことは何かと云ふことを質問されたときに答が出来ないのでは，是は講釈するに値しない者であると云はれなければならぬといふ考が起って来まして，どうしても『生きて居る』ことは何かといふことが切実な問題になって参ったのであります」[9]

「『生きて居る』ことは何か」――この大きな問いへの応答を試みるにあたり，橋田は「何か禅の書物でも読めば，或は禅といふものへでも入り込めば，生命とは何かといふ事へ光が見出されはしないかといふやうな気持」[10] を抱く．そして，自身の生理学研究のかたわら，道元の『正法眼蔵』研究に着手し始めるのである．

1921年に『蛙皮電動性に関する研究』で医学博士号を取得し，翌年には生理学第二講座の教授就任を果たした橋田は，東京帝国大学にて開催された第1回大日本生理学会（1922年）の運営や，私費での英文雑誌『生物物理学（*The Journal of Biophysics*）』[11] 創刊（1923年）などにも尽力していた．しかし，生理学者としての活動が軌道に乗り始めたちょうどこの時，1923年9月，関東大震災が発生し，研究室は壊滅，多くの研究データが灰と化し，第一次世界大戦に次いで，橋田はふたたび大きな痛手を負うこととなる．その後しばらくは粗末なバラック小屋へと場を移し研究に取り

組んでいたが，震災から8年後の1931年には新研究棟が完成，それ以降は冷陰極オシログラフを設置して皮膚などの分極実験を行ったり，電磁オシログラフを用いて日本人の母音を解析したりと，自身の生理学研究を展開させていった．その一方で，『正法眼蔵』研究にもより一層の力を入れるようになる．「大震災などあってもそれでも少しも変わらないもの」[12]――橋田は『正法眼蔵』をこのように捉え，「『生きて居る』ことは何か」という問いに真摯に取り組み続けたのである．

生理学研究に従事するにあたり，「『日本の生理学』を確立する捨石」[13]となるといった気概を示す橋田であったが，他方で，学生や教室員のために課外講義を行ったり，学外活動に積極的に参与したりする一面もこの頃から見せ始める．とりわけ1930年代に入るとその活動は顕著となり，東京帝国大学仏教青年会健康相談部と医道会[14]（ともに1930年成立）や，月曜会（1931年結成，後の碧潭会），生機学談話会や発生法研究会（ともに1933年結成），昭医会や日本医学研究会（ともに1935年結成），「医育刷新委員会」（1938年結成）などといった会合において，橋田は指導的な役割を果たしていた．そして，『碧潭集』（1934年）と『空月集』（1936年）といった橋田の主著として知られる2冊がこれらの活動の集大成として出版され，各方面での反響を呼び，寄稿や講演の依頼が頻繁に舞い込んでくるようになる．それらの依頼を精力的にこなしていく橋田の活動範囲は，文部省思想視学委員就任（1935年）といったものにまで及び，遂に1937年，彼にとって大きな転機である反面，多くの弟子が後に「悲劇の始まり」と振り返る第一高等学校校長就任が決まる[15]．一高では橋田自ら，文科・理科二学年合同の倫理の講義担当となり，学問と思想の問題や生と死との問題を1年間繰り返し説くなど，次世代の教育に力を入れていた[16]．

そして1940年には，安井英二の推薦で第二次近衛内閣の文部大臣に就任，東大教授を辞職し，生理学者から教育行政家へと橋田は転身を遂げたのである．教育行政の頂点に突如身を置くこととなった橋田は，「科学する心」というスローガンを掲げ，科学の振興こそが日本文化の最も重要な課題であるという自身の考えから科学課の科学局への拡充，また，知育・徳育・体育が三位一体となった教育が重要であるということから体育局の創設など，さまざまな戦時下の教育政策に関与し，決定していくこととなる．1941年10月，内閣が近衛から東條へと移る際，橋田は自身の進退を迷ったものの，留任を決意する[17]．だが，自身が組織の頂点にありながら，大学教育の年限短縮案や学徒動員などといった政策が，意に反して次々と決定されていく現実を目の当たりにし，1943年4月，遂に文部大臣を辞任することとなったのである．

橋田が去った後，文部大臣の席に着いたのは東條英機であり，学徒出陣の閲兵式が華々しく代々木にて挙行された．橋田の研究室からも何名か戦地に送り込まれることとなったが，彼らの壮行会で，人知れず涙する橋田の姿が目撃されている[18]．1944年になると教学錬成所所長に就任するものの，1945年8月15日終戦，9月12日にはA級戦犯に指名されることとなる．

そして1945（昭和20）年9月14日，弟子たちによる必死の説得もむなしく，警察署長が召喚のため自宅を訪れた際に青酸カリで服毒自決を図り，この世を去った．自決の翌日，鞄の中から遺書や辞世の句[19]などが見つかっている．

Ⅱ：従来の橋田邦彦研究

戦時下の文部大臣を務めたことで終戦直後にA級戦犯に指名され，青酸カリ自決を遂げるという最期は，「橋田邦彦」を公然と語るという行為を長きにわたり憚らせてきた．戦後，本川弘一といった彼の高弟すら，橋田のことを語る際には声を潜めるようにしたという[20]．当然，学術的な研究の対象として十分に検討されることはなく，今日では彼の名前さえ知る人の数もごくわずかであろう．もしかすると，金森修が指摘するように，橋田は「私たちの歴史認識が意識的に避けて通る空白地帯の中にいる」[21]のかもしれない．

それでも，「教育行政家としての橋田」や「科学論者として橋田」について論じた学術的研究は

何点か残っている．たとえば「教育行政家としての橋田」について，教育学者である中内敏夫は，橋田を「超国家主義体制下の教育改革運動を上から指導した日本文政史上初の学者文相」としたうえで，その理論を，日本の教育の「東洋化による近代化」をめざす系譜に位置づけている．また，『正法眼蔵』研究を基礎とした橋田の論理のなかには，日本人が「新教育」に近づいていくひとつのルートがあったとしつつ，同時にそれが天皇制教学体制へと吸収されていく危険性をも含み持っていたという点を中内は指摘している[22]．また，同じく教育学者である志摩陽伍は，橋田の理論が「『日本精神主義』や，分科主義の主張はもとより，多くの教育学者，科学者の教学論，科学論をその傘下におさめる力量」を持ち合わせ，「科学」を「皇国ノ道」に結びつける理論操作を行った教学イデオローグとして彼を捉えている[23]．

他方，「科学論者としての橋田」については，科学史家である吉仲正和が，西欧の機械論的な自然観にたいして，日本人の自然観は生命体論的であるという前提を踏まえたうえで，日本的自然観を背景にし，ともに普遍的であることを尊重する仏教と科学の衝突を橋田の科学論のなかに見いだしている．そして，橋田における全体論の形成過程を生理学と関連させて考察し，科学を創造する「『人』のはたらき」として捉え直す彼の理論を検討し，彼が執着した「日本の科学」の主張と国家主義の結びつきを吉仲は示唆している[24]．また，フランス科学認識論を専門とする哲学者の金森修も，橋田が「宗教者としての実践を当の生理学的研究自体の内部に組み込もうとしたという事実を注視」し，「曹洞禅という，これほど非自然主義的なものはないと思われる思想を，生理学という自然主義的実践とどのようにリンクさせていたのか」を明らかにするべく，橋田の思想的文献の解釈を行っている[25]．

このほか，「道元研究者としての橋田」に着目した先行研究も何点かあるが[26]，それらにたいする言及は，本稿においては差し控えることとしたい．理由は2点ある．まず，それらの研究の主要文献となるであろう橋田の『正法眼蔵釋意』は，橋田の実兄である藤田敏彦によれば全12巻で完結する予定であったものの，彼の自決によって第4巻までしか残っていない未完の書となっている．したがって，それらの先行研究が対象としているのは橋田の『正法眼蔵』解釈全体における極めて部分的なものであると言わざるを得ないという理由がまず1点目である．そしてもう1点としては，そもそも日本思想史上最も難解といわれる『正法眼蔵』を精読し理解したうえで，橋田の『正法眼蔵』解釈を分析する能力が筆者自身に未だ備わっていないことが挙げられる．本稿の紙幅も考慮すれば，別個扱いにするのが適当であろう．

このように，従来の研究においては，「橋田邦彦」という人物の多様な側面――第一高等学校長や第56代文部大臣などを歴任した教育行政家としての側面，全体論や「日本の科学」にかんする主張を展開した科学論者としての側面，「『生きて居る』ことは何か」ということを道元の『正法眼蔵』より導きだそうと試みた思想家としての側面――が焦点化されてきた．しかし，このような橋田の多様な諸側面を個々に主題化してきたことによって，それぞれ独立した橋田像が描出される一方，「橋田邦彦」という思想家の全体像については今日まで等閑に付されてきたと指摘せざるを得ないだろう．

あらかじめ断っておくと，本研究は，私たちの歴史認識が橋田を意識的に避けていることへの各自の内省を求めるものでもなければ，「葬られた思想家」を単なる好奇心からふたたび蘇らせようといったものでもない．一生理学者でしかなかった橋田が，医学部教員として戦後を代表する医学者を数多く育成するにとどまらず[27]，いかにして日本的科学論の代表的論客として一世を風靡し，あるいは『正法眼蔵』研究者として活躍し，戦時下における教育行政の主導者へとなり得たのか．そして，この「葬られた思想家」の思想そのものの全容はいかなるものであったのか，また，私たちの歴史認識が意識的に橋田を避けているのであれば，それによって見逃してしまっている議論や視座はないのかというところに，本研究における

問題関心が存在するのである．この問いに取り組むにあたり，先行研究のなかで最も注目したいのが，教育学者である清水康幸による研究[28]である．

橋田の科学と教育にたいする思想を検討することによって戦時下教育思想研究への視角の提示を試みる清水は，従来の教育史学における橋田研究について，「教育には全くの素人であった生理学者橋田の中から，何故にこのような思想が生じ，また現実的な力を持ったのかという問題，つまり橋田思想の戦時下教育思想にとっての意味を，その発生根拠に遡って解明する点では極めて不充分である」と批判したうえで，「橋田の教育史的意義は，経歴から想像される教育行政家としての役割りよりは，思想家としての役割りにこそあったというべきであり，この点が橋田に，日本近代教育史上の独特の位置を与えている」とする．そして，橋田を研究する際の視点として，「第一に，橋田の思想をその完成形態においてだけでなく，思想形成史に遡って検討すること，第二に，思想それ自体が内在的に提起していた問題と，それが歴史的社会的に果たした機能とをひとまず区別して考えること，第三に，橋田の思想が何よりも生理学に基礎をおき，しかも陽明学や禅の思想と結びついている点に留意すること」が必要であると清水は論じている[29]．

橋田の思想形成史に遡って検討するのであれば，その原点はどこか．清水は，「東洋文化と西欧文化という二つの異質の文化の間に通い合う科学の論理をどのように引き出し，真に日本の地に根ざした科学を創造するのか，という問いの中に，生理学者としての道を選んだ橋田の出発点と思想の原点があった」[30]と分析している．清水の指摘どおり，とりわけ橋田の幼少期から学業時代までに注視すると，そこには，父親である藤田謙造による教育や，彼の学問観や人生観の基礎をなす2つの古典である王陽明の『伝習録』と張仲景の『傷寒論』との出会いがあるとともに，それらの教育や古典によって鍛えあげられた「幼少期以来の東洋的エートス」が「一高・東大というエリートコースを通じた西欧科学ないし西欧文化の洗礼」というまったく異質の契機と衝突することが確認できよう[31]．そして，終生肌身離さず愛読した『傷寒論』から橋田が「医とは何か」を学び，現代医学批判の論理を導き出すとともに，漢方的発想への着目が彼の生理学や科学論の全体論的発想へとつながったとし，ファシズム教育の進行とは全く独自の経路を辿って形成されてきた橋田の論理が，1935年以後，時代が要請するファシズム的教育政策と親和的なものとなっていったと清水は考察を続けている．

確かに，橋田邦彦を研究の主題とするのであれば，その思想形成過程を追跡すること，思想そのものとそれが果たしていた歴史的・社会的機能をひとまず区別することが必要であるといった清水の見解は，彼の思想の全容を明らかにすること，そして未だに手つかずのまま残っている議論に光をあてることを目的とした本研究にたいして大きな示唆を与えるものである．だが，橋田の思想が陽明学や禅の思想と結びついていることは認められたとしても，彼が何よりも生理学に自身の思想の基礎をおいていたという点については慎重な見方をすべきだろう．そもそも，橋田の思想の全容を解き明かすうえでの土台となる思想とは彼のどの思想なのかという点に細心の注意を払うべきであり，それによって打ち出される方向性によって「橋田邦彦」の全体像が大きく変わるといっても過言ではない．橋田の日本的科学論か，『正法眼蔵』を中心とした仏教思想か，あるいは，彼が教育行政家として展開した教育思想なのか．だが，これらの思想はどれも一面的で，1つの側面を扱おうとすると，たちまち他の側面は捨象されるといった，従来の研究と同じ誤謬を犯すこととなる．この問題は，次のようにも言い換えることができよう．橋田思想の全体を支える基礎はいかなるものなのか，橋田の思想形成過程を論究するうえで主軸とすべき彼の思想は何か．

Ⅲ：「医」の思想家としての橋田邦彦

橋田の思想を支える基礎，そして彼の思想形成過程を考察するにあたり，まずはその過程にたいして，実父からの教育で東洋思想の素養を習得した幼少期を思想形成過程上の初期，一高・東大と

近代科学の洗礼を受け，生理学者・科学論者・『正法眼蔵』研究者といった諸側面を持つようになる中期，そして教育行政家へと転身を図り，戦後自決に至るまでの後期といった，3つの時期区分を設けてみることにしたい．この時期区分を概観するに，中期に鍛え上げられた独自の科学論や『正法眼蔵』研究に基づく仏教思想といった橋田の理論を，後期にて実社会の政策決定などといった社会実践化の際に反映させたという点では，中期と後期との間のつながりを容易に見出すことができよう．しかし，『伝習録』や『傷寒論』といった古典をテクストとして東洋思想の素養を実父から習得した初期と，近代科学を支える一員として育成され，生理学研究に従事しながら独自の科学論や『正法眼蔵』解釈を展開する中期についてはつながりが見いだせず，むしろ，上京して一高・東大へと進学することで近代教育の洗礼を受けるといった出来事によって両者のつながりがすっかり断絶してしまっているように見受けられる．

橋田の思想形成過程の原点は，漢方医である藤田謙造による家庭教育であることは論を俟たないだろう[32]．橋田が何をいかにして学んだのかという詳細こそ残っていないものの，実父より教えられた王陽明の『伝習録』と張仲景の『傷寒論』を生涯にわたり精読し，自身の思想の基礎としていたことは確かである．だが，彼の著作において，王陽明や張仲景にかんする言及は確認できても，それら自体を考察対象として詳述するまでには至っていない．これに加え，養家への気づかいなのか，橋田は漢方医である実父のことをほとんど著作に残していないことは特記に値するだろう．つまり，思想形成過程の原点は特定できたとしても，思想形成過程の初期に「形成されたもの」がいかなるものなのかといった肝心なところを判然とさせることは，今日に伝わる資料群のみでは困難を極める．橋田の思想形成過程を論究するうえで，彼の生涯を貫くような思想の主軸は存在しないのだろうか．

しかし，ここで改めて橋田の著作をひも解いてみると，ある1つのことに気がつく．それは，従来の研究において検討対象となっていた科学論や法話にかんする多くの著述もさることながら，「医」にかんする豊かな論考を橋田が残しているという点である．橋田自身，「偶々私の生ひ立ちました家が医者の家であり又養家も医者の家であり，『医』といふことに就いては子供の頃から何かしら頭に浸み込んで居ります」[33] という言葉を残している．そして，その彼が臨床医ではなく生理学者の道を選んだ動機について，「医術を以ては病気を治癒し得る保証は出来ないのであるから，究明し難い診療の業に従う事は自分の本懐でなく，医道の根源である生理学の研究を志すのである」[34] と同郷の旧友である吉村欣二に述べている．

事実，彼は一高・東大にて近代科学の洗礼を受け生理学者となった．しかし，近代科学を支える研究者の一員として研究に従事するうちに，自らが従事しているものへ疑問を抱くようになる．

> 「総てが科学的にのみ観られ又考へられて行く世の中に生ひ立つて居りながら，しかも其科学と云ふものの中に没頭して見ると云ふと，如何にも科学と云ふものは，それ丈では物事を正しく観て行くのに物足りないことを感じます．これは何も生理学丈の問題ではなくて，医学一般乃至は科学一般と云ふものが，さう云ふ気持ちを持たせるものであるといふ事を，日々痛切に感ずるのでありまして，其立場から自分の職責として，「医」を学ばんとする人の教養に携はると云ふことを許されて居る関係上，勢ひ先ず現代医学の欠点を指摘せざるを得ないと云ふことになって来るのであります．」[35]

「科学だけではものごとを正しく見ていくには物足りない」――医学部教員として近代科学としての医学を講ずる立場となったとき，幼少期より頭に浸み込んでいた「医」の概念が橋田のなかで覚醒する．そして，駆り立てられたかのように現代医学批判や近代科学批判を繰り返すようになるのである．このことは，橋田の思想形成過程の初期と中期のつながりを「医」という概念が結んでいるとの推論を提示する際の1つの証左となりえよ

う．このつながりを受け継ぐようにその過程の後期にて，すなわち1930年代における東京帝国大学仏教青年会健康相談部や医道会，昭医会や日本医学研究会，さらには医育刷新委員会といった会合で中心的・指導的な立場となる時期にて，橋田は自身の「医」の概念の社会実践化に注力していったとも考えられよう．

そのなかで，わけても1935年に結成され，橋田が顧問を務めた日本医学研究会は，その趣意書に「現代科学的医学と東洋本有の医術とを集大成し，学術道三者帰一を要諦とする本邦独自の医学の建設を期す」[36]と記されていることからもわかるように，彼の「医」の思想を大きな精神的支柱として成立した組織であるといっても過言ではない．この組織が発足した経緯の詳細について，馬場和光は次のように述懐している．

> 「漢方は実際にきくという話になり，当時の一般的な通念からすれば全く雲をつかむような話であり，あるいはインチキとかだまされたのだとか評する人も出て来るわけで，反論する余地のないものであるが為にはそれに科学性を与えなければならないということになり，大きな研究設備を持ちまた多くの患者を集め得るような組織を必要とするわけであり，［……］ぼつぼつそのような運動をはじめて行くよりほかにないというので，［……］「日本医学研究会」という小さな集りを作りました」[37]

橋田の漢方への関心や造詣の深さは，実父・藤田謙造ゆずりであることはもはや言うに及ばない．漢方の金科玉条として『傷寒論』を挙げる橋田は，生理学研究室に集まる弟子に，原南陽『経穴彙解』，稲葉克文礼『腹証奇覧』，和田啓十郎『医界之鉄椎』，湯本求真『皇漢医学』などといった漢方にまつわる書物を読むよう勧める．なぜなら，「医」の体現者は，近代医学者のなかにはおらず，もっぱら吉益東洞や浅田宗伯，山脇東洋といった漢方の大家であると橋田が考えるためである[38]．橋田の高弟である杉靖三郎などは，生理学研究を続けるのであれば中西深斎の『傷寒論名数解』を読むよう教示され，「江戸時代の皇漢方こそは，医学の本道を行くものであり，これからの医学・医術は，この本道に立ちかえらねばならない」[39]と橋田に告げられている．漢方は「そのまま吾々が取って学ばなければならないものであると信ずる」[40]とまで主張する橋田は，漢方こそが現代医学の欠点を補填してくれるものであるという考えを持ち，1936年には当時の文部大臣へ「東洋医学研究所」の設立まで要請している[41]．

このような一連の橋田の言動は，瞥見するとある種の懐古主義のように捉えられよう．だが，橋田自身が「現代の科学的医学との全然別個のものとしてそのまま守り立っていこうといってもそれは全く無理であります．ある意味からは時代錯誤的な話であるともいえないことです」[42]と述べることからもわかるとおり，かつて父親が漢方復権に尽力したように，彼も漢方そのものをふたたび現代医学に代わるものとして蘇らせようとしていた訳ではない．このことは，「東洋には医術はあったが医学はなかった」[43]という見解を示したうえで，漢方を「漢方医学」ではなく「漢方医術」と呼ぶ橋田の語法からも裏付けられるだろう[44]．「医」の思想家として橋田が目指したのは，日本医学研究会の会規第2条「目的」[45]と同様，現代医学と漢方医術の融合による日本医学の樹立であったのだ．

Ⅳ：橋田邦彦研究にむけて

以上，Ⅰ～Ⅱをつうじて本研究の主題である橋田邦彦の生涯や先行研究を整理し，Ⅲにて彼の思想形成過程を論究するうえで主軸となり，研究における新たな考察対象――「医」の思想家としての橋田邦彦――の提示とその可能性にかんする論及を行ってきた．彼の多様な諸側面を個々に主題化することで，それぞれ独立した橋田像を打ち立てる一方，「橋田邦彦」という思想家の全体像を描出することを等閑視してきた従来の研究にたいし，この「医」の思想家としての側面は，それ自体が彼の多様な諸側面のうちの1つでありながらも，彼の思想形成過程の主軸となり，「橋田邦彦」という人物の思想の全容とはいかなるものなのか

という大きな問いへ十分応答しうる可能性を秘めている．本稿における作業は，橋田邦彦という「葬られた思想家」をふたたび議論の対象として蘇らせるという点で，あるいは私たちの歴史認識が意識的に避けているものにたいして目を向け，再考するための動機づけという点で不可欠なものであると考えられよう．だが，本稿は他方で，橋田邦彦研究のための足がかりを用意したに過ぎず，無論，彼の思想の具体的な内容やそれに内在する問題にかんしてはいくつかの別稿を用意しなければならない．ここで，今後研究を継続するうえで，取り組むべき研究課題を3点ほど述べておくことにしたい．

1点目は，橋田邦彦の「医」の概念そのものにたいする精察である．橋田の第一高等学校時代からの学友にあたる西成甫は，「医学部の教授である橋田君はまた到る処に医道を説く．［……］これは確かに現代医界への頂門の一針である」[46]と述べ，京都学派の哲学者として知られる高山岩男にいたっては「著者（橋田）の医を中心としてのこれらの考察は抽象的な哲学者に教ふる所尠なくない」[47]とまで評価している．このことは，橋田研究においては彼の「医」の思想家としての側面を論じる必要があることの新たな証左の1つとなろう．橋田は「医」とは医学・医術・医道の三要素からなるものとするが，それらはそれぞれどのような要素であったのか，また，三要素がいかなる結びつきをみせて「医」の概念を構成していたのかということについて論及する必要がある．

2点目は，橋田の「医」の思想における「全機」ないし「全機性」[48]という概念への考察である．「全機（性）」とは，道元の『正法眼蔵』研究をつうじて体得した概念であると考えられるが，橋田は「医」とは，「全機」の立場において現成されるものであると論じている[49]．この「全機（性）」という概念を把握し，橋田がどのように自身の「医」の概念と結合させていたのかを検討する必要があり，これによって，彼の「医」の思想や科学論の独自性をより明確化させることができるだろう．また，東洋医学の特色として大塚敬節が「全機性」を挙げていることを踏まえれば，橋田の思想形成過程における東洋医学の影響をも考察することができよう[50]．

さらに，橋田の「医」の思想が社会実践化されようとする過程を，彼の死後も含めて明らかにすることも目指されよう．橋田の服毒自決は，医学界に大きな衝撃を与えた[51]．それだけでなく，公職追放される医学者も続出するなど，戦後の混乱がみられたが，これと同時に，医学者たちによる反省も数多くなされるようになる[52]．そして，それらの反省を踏まえ，医学教育にて「医学概論」などといった医学にかんする総合的な科目の開講がいくつかの大学で本格的に検討されることとなったが，この動向は既に戦中よりみられ，1941年に大阪帝国大学医学部で開講された澤瀉久敬の「医学概論」などはその先駆的事例として知られている[53]．その澤瀉は「医学概論」の講義を構築するにあたり，馬場和光の『人の医学概論』を精読しているが，この書は，橋田の弟子であった馬場が，師から教示されたF. Krausの“*Die allgemeine und spezielle Pathologie der Person*”（Leipzig: Thieme, 1919）を基本文献として，臨床医学の観点から医学思想をまとめたものであり，『人の医学概論』の校閲を務めた橋田自身の「医」の思想が色濃く反映されている．また，これと合わせて澤瀉は，「医学概論」を外部から支持してくれていた人物として浦本政三郎や佐々貫之といった橋田の教えを受けた者たちの名前を挙げている[54]．このことを澤瀉自身が認識していたか否かは今となっては不明であるが，少なからず橋田の「医」の思想が，姿かたちを変えたとしても，葬られることなく受け継がれていったと言っても過言ではないだろう．橋田の思想が理論にとどまらず，いかにして医学界や教育界といった実社会において社会実践化されようとしたのか，また，それらが戦後に与えた影響とは具体的にいかなるものであったのかという点を3点目の研究課題として挙げ，本稿を閉じることにしたい．

謝　辞

本研究は，財団法人武田科学振興財団2009年度杏雨書屋研究奨励による研究成果の一部であ

る．多額の研究費を自由に使わせていただいた当財団に，深い謝意を表したい．

註

1）本稿は2008年度東京大学大学院教育学研究科修士学位請求論文，勝井恵子「橋田邦彦における「医」の構造―「医弊」から「格医」へ―」（2009年1月，未発表）から一部抜粋し，加筆，再構成したものである．

2）東京大学大学院教育学研究科博士課程院生，北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部客員研究員

3）下坂2007

4）清水1982．詳細については本稿のIIで述べることとする．

5）藤田謙造の著書として，『温知堂雑著』，『道徳論及五性七情ノ関係』，『経験方論』，『得益録』などが知られる．藤田謙造の個人史については，［渡辺・小曽戸・花輪2010］に学ぶところが多い．

6）橋田1934：258頁．なお，橋田の自宅書斎には，恩師である大沢謙二によって書かれた「清貧」という二文字の横額が掲げられていたといわれることから，この言葉には，彼の相当な思い入れがあったとみられる．

7）橋田の実兄である藤田敏彦（1877–1965）も東京帝国大学医科大学卒業後，生理学者となり，東北大学医学部教授や岩手医科大学学長などを歴任した．1963年には武田医学賞を受賞するなど，感覚生理学の権威として知られる．

8）渡欧時の橋田の研究態度は，ツァンゲルが「電位の測定を5万回繰り返したほどの熱心な男」と評したほど，熱心なものであったという［下坂2007：244頁］．

9）橋田1940：342–343頁．［……］は引用者による中略．

10）橋田1940：344頁

11）しかし本誌は経済的な問題によってわずか2巻で休刊，その後は『日本医学輯報（3）』に吸収された．

12）東京大学医学部生理学同窓会（編）1976：27頁．この言葉は，橋田の高弟の1人である坂本嶋嶺が，橋田から『正法眼蔵』の勉強に誘われた時のもの．

13）東京大学医学部生理学同窓会（編）1976：31頁

14）この2つの会合は表裏をなすもので，橋田が文部大臣就任により東大教授を辞職するまでの約10年間継続されたという．東京帝国大学仏教青年会健康相談部については，当時，東京帝国大学仏教青年会にて法学部生の有志による無料の法律相談が行われていたのに習い，本郷三丁目の仏教青年会の下にささやかな診療所をつくり，毎週水曜日の午後1時から3時まで医学部生が無料健康相談を行うというものであった．あくまで学生であるため，投薬は行われずに問診のみであったものの，多くの市民が訪れ，学生にとっては格好の実習場となったという［東京大学医学部生理学同窓会（編）1976：152頁］．そして，その無料健康相談で経験したことを議論する場が医道会であった．医学部生や教室員のみならず，他教室や市中の病院からの参加が毎回30～40名程度あり，18時過ぎから21時頃まで開かれる会合では，医学全般のこと，わけても治療上の問題や安楽死にかんする問題などが議論となったという［東京大学医学部生理学同窓会（編）1976：37頁］．

15）東京大学医学部生理学同窓会（編）1976．当時の思想局長であった伊東延吉の懇請を受けた橋田は，東大教授と兼任することを条件に一高校長就任を了承した．

16）高木彬光の推理小説『わが一高時代の犯罪』（初出：1951年）には，一高校長としての橋田が実名で登場する．1937年に第一高等学校理科乙類に合格し，実際に在学していた高木は，橋田を次のように描写している．「橋田校長の身辺には，たえず峻厳の気がみなっていた．孤高，低きに下るをいさぎよしとしないその性格は，ややもすれば狷介に近くなった．博士は尊敬されたが，敬愛されなかった．」「博士は一高の校長たるべき人ではなかったと思う．思想家としては，学者としては，博士は当代の偉材であったろう．人格者としても，たしかに稀に見る人物であった．しかし博士には青年の心をつかむ魅力がなかった．［……］そして，政治家としての才能は――それは歴史のしるすとおりである．」［高木1973：53頁］．［……］は引用者による中略．

17）橋田の高弟の1人で，当時秘書を務めていた内山孝一によれば，時局は外交によって解決すること，そして文部行政の一切を任せるとの条件で留任したという［東京大学医学部生理学同窓会（編）1976］．

18）東京大学医学部生理学同窓会（編）1976：207頁

19）「大君の　御楯ならねど　国の為め　死にゆく今日は　よき日なりけり　いくそたび　生れ生れて　日の本の　学びの道を　護り立てなむ」

20）吉仲1984：8頁．A級戦犯に指名され，自決した橋田にたいしては，死屍に鞭打つような声も少なくなかった．たとえば，秋元壽恵夫は「わが国の科学者の中には，はっきりした政治的意見をもっている者はむしろ稀であるといってよいので，そのよしあしは別として結果からみれば，積極的にファシズムの理論を肯定し，全体主義を通じて天皇制ミリタリズムと野合し，相共に狂奔した輩はそう多くはなかった．その上，さすがにそういう札付の人物は，戦後あるいは自ら生命を断つなり，追放にあうなりして，少なくとも第一線からは姿を消した．」［秋元1947：2–7頁．※強調は引用者］と，橋田の実名は挙げないものの，痛烈な批判を与えている．

21）金森2004：35頁

22）中内1961

23）志摩1962．このほかに，「教育行政家としての橋田」

について，1944年という早い段階で教育史家である藤原喜代蔵が，「森有礼も彼には三舎を避くるであろう．［……］彼は今，彼の人物，功績に就いて，未だ十分世に認められて居ない．［……］今後戦争が終結し十年二十年の歳月が遷れば，必ずや，彼の功績を讃え，彼の人物を賞揚し，三代を通じて，第一頭の名文相と断定する時が来るに相違ない．」［藤原1944：515–6頁．［……］は引用者による中略．］と絶賛している．

24）吉仲1984

25）金森2004：Ⅴ頁

26）たとえば，松本皓一や石井公成，菅原研州の研究などが挙げられる．

27）橋田の高弟として，前掲の本川弘一や内山孝一，東竜太郎や時実利彦，杉靖三郎や馬場和光などが知られる．詳しくは，［東京大学医学部生理学同窓会（編）1976］を参照されたい．橋田が多くの優秀な医学者を育成することができた背景として，吉仲正和は「東大の助教授，教授のポストにいたという面もあるが，一つの独特の理念を持つ（個性ある）実験科学者であったこと，およびその人格によるところが大きい」［吉仲1989：202頁］と分析している．また，関根透は橋田について「医学の本質を医学生に教授していた」［関根2007：208頁］と述べている．

28）清水1982，清水1984

29）清水1982：32–33頁

30）清水1982：36頁

31）清水1982：33頁

32）この点については，先行研究においても同様の指摘がなされている．たとえば，金森は「橋田は浅田門下の父親から，漢方の価値をおそらくは聴いていただろうし，漢方と西洋医学との対峙という問題系は必然的に医学の背後の生命思想にまで人の関心を導くものだったに違いない」［金森2004：15頁］とし，清水にいたっては「橋田の思想形成上，父親の影響は決定的」［清水1982：33頁］とまで述べる．

33）橋田1938（一）：223頁

34）吉村1961：24頁

35）橋田1936：379–380頁．※強調は引用者

36）日本医学研究会（編）1938：8頁．この趣意書の執筆者は不明であるが，その内容を橋田の「医」にかんする著述と比較すると，言葉づかいから内容まで，まったく彼の主張そのものであると言っても過言ではない．このことは，橋田の思想が日本医学研究会においていかに強大な精神的支柱として存在したかを示す一例として数えられるだろう．

37）東京大学医学部生理学同窓会（編）1976：120頁．［……］は引用者による中略．

38）橋田1934：43頁

39）杉1988：4–5頁．橋田は，漢方医術はたしかに中国から日本に伝来したものではあるが，ことに徳川時代にいたって独自の発達をした経緯があり，日本の漢方医術は日本独特のものといって差し支えないという見解を示す．そのうえで，「漢方医術はいわば吾々の宝であります．しかしそれは固定化された宝であってはならない．動く宝としてその意義を発揮せしめなければならない」［橋田1977：129頁］と述べる．

40）橋田1977：128頁

41）清水1982：44頁

42）橋田1977：129頁

43）橋田1934：152, 337頁

44）しかし，橋田の著作をみるに，「漢方医術」という表現は完全な統一が図られているわけではなく，「東洋医学」や「漢方医学」，「漢法医術」や「漢方医法」などといった表記がなされている部分も認められる．

45）日本医学研究会（編）1938：8頁．第2条は次のとおり，「本会の目的は科学的現代医学と東洋本有の医術とを綜合し，本邦独自の医学を建設するにあり」．

46）帝国大学新聞1934年3月5日号

47）高山1934．（ ）内は引用者による補足．

48）以下，「全機（性）」と略記する．

49）橋田1936：373頁

50）澤瀉1964：171頁＝大塚1976：169–170頁

51）日本科学史学会（編）1965：374頁．橋田が自決する前日の1945年9月13日には厚生大臣を務めた小泉親彦が自決しており，東大卒の医学者であり，戦時下における医療と教育の主導者であった両者の自決は，医学界にとって大きな衝撃であったといえよう．

52）代表的なものの1つに，［原島1946］が挙げられる．原島は，医学が国民生活に直結せず，生活向上への奉仕を怠ったという点に医学者の反省を促すとともに，医学にたいする態度についての国民の反省も求めている．

53）澤瀉は「医学概論」を医学の哲学として位置づけ，「基礎および臨床の諸医科学ではなく，医学の本質はなにか，医学の方法はなにか，医学の使命はなにかなど，要するに，医学とはいかなる学問であるかを研究する学問」であるとする．そして，「すでにみずから医学を学び，それを身につけている者が，いったい医学とはなにかを反省するところに成立」するこの学問は，「国民の医学的幸福に直結する」と澤瀉は主張していた［澤瀉1967：168–170頁］．

54）澤瀉1964

文　献

◆一次的文献

橋田邦彦（著）山極一三（編），『碧潭集』，東京：岩波書店，1934年

――――（著）山極一三（編），『空月集』，東京：岩波書店，1936年

————，「医道（一）」『医事公論』，1938年，第1364号
————，「医道（三）」『医事公論』，1938年，第1366号
————，『正法眼蔵釋意　第一巻』，東京：山喜房佛書林，1939年
————，『正法眼蔵釋意　第二巻』，東京：山喜房佛書林，1940年
————，『正法眼蔵釋意　第三巻』，東京：山喜房佛書林，1944年
————，『正法眼蔵釋意　第四巻』，東京：山喜房佛書林，1944年
————（著）東京大学医学部生理学同窓会（編），『生体の全機性―橋田邦彦選集』，東京：協同医書，1977年

◆二次的文献

秋元壽惠夫，「科学者と戦争責任―学術新体制以前の問題」『日本臨床』，1947年，第45巻6号
大塚敬節，『漢方ひとすじ』，東京：日本経済新聞社，1976年
澤瀉久敬，『医学の哲学』，東京：誠信書房，1964年
————，『医学と生命』，東京：東京大学出版会，1967年
金森修，「橋田邦彦の生動と隘路」『自然主義の臨界』，東京：勁草書房，2004年
志摩陽伍，「国民学校の教育」『岩波講座現代教育学5 日本近代教育史』，東京：岩波書店，1962年
清水康幸，「橋田邦彦における科学と教育の思想―戦時下教育思想研究への一視角―」『日本の教育史学』，1982年，第25集
————，「戦時下教育における『科学』の問題」『講座 日本教育史4　現代Ⅰ／Ⅱ』，東京：第一法規出版，1984年
下坂幸三（著）中村伸一・黒川章史（編），『フロイト再読』，東京：金剛出版，2007年
杉靖三郎，「新日本医学の建設―『日本医学』誌の思い出―」『漢方雑誌復刻選集（附）解説・索引』，大阪：オリエント出版社，1988年
関根透，『医療倫理の系譜―患者を思いやる先人の知恵』，東京：北樹出版，2007年
高木彬光，「わが一高時代の犯罪」『高木彬光長編推理小説全集2』，東京：光文社，1973年：53頁
高山岩男，「思想時評」『思想』，1934年，第151号
東京大学医学部生理学同窓会（編），『追憶の橋田邦彦』，東京：鷹書房，1976年
中内敏夫，「現代日本教育における東洋化と近代化―昭和期の『成蹊』教育と橋田邦彦『国民学校令』の場合―」『成蹊学園教育研究所所報』，1961年，第4号
日本医学研究会（編），「日本医学研究会 宣言・趣意書・会規・役員」『日本医学』，1938年，第1巻1号
日本科学史学会（編），『日本科学技術史大系 第24巻・医学〈2〉』，東京：第一法規出版，1965年
原島進，「医学の反省」『医学と民生』，1946年，第2号
藤原喜代蔵，『明治大正昭和教育思想学説人物史　第4巻』，東京：日本経国社，1944年
吉仲正和，『科学者の発想』，町田：玉川大学出版部，1984年
————，「文部大臣自決事件―橋田邦彦―」『スキャンダルの科学史』，東京：朝日新聞社，1989年
吉村欣二（著）橋田邦彦先生遺徳顕彰会（編），「追憶」『橋田邦彦先生のおもかげ』，非売品，1961年
渡辺浩二・小曽戸洋・花輪壽彦，「浅田宗伯門人，藤田謙造の学統」『日本医史学雑誌』，2010年，第56巻2号

A Study of Hashida Kunihiko's Thought:
The Life History and Thought of an "Outcast Thinker"

Keiko KATSUI

Graduate School of Education, The University of Tokyo / Oriental Medicine Research Center, Kitasato University

Hashida Kunihiko (橋田邦彦), described and known as "an Outcast Thinker", was born in Tottori, in 1882. From his young age, he was taught oriental thought by his father Fujita Kenzo, a practitioner of Kampo medicine. While Hashida taught physiology as a faculty member at the Imperial University of Tokyo, he studied Dogen (道元)'s Zen philosophy and developed his original philosophy of science to answer the question: "What is Life/Living (生)?". After taking the oath of office as the 56th education minister of Japan from 1940 to 1943, he committed suicide in 1945, taking the responsibility for his policy-making of nationalistic education at time of the Second World War.

Some previous studies on Hashida have focused on various aspects such as his work as a physiologist, a scientist, a scholar of Zen philosophy, and an educrat. He may be well known in each of these different disciplines, whereas how these different aspects are integrated in Hashida's thought as a whole has not been clarified yet. Taking the propositions in those previous studies on him into account to totally understand Hashida as a thinker, this note will focus on the potential perspective for his undiscovered aspect: "Hashida as Medical Philosopher".

Hashida has perused and loved two classical texts on oriental thought and oriental medicine, which are "Chuan Xi Lu (伝習録) " and "Shang Han Lun (傷寒論)", during his lifetime and learned many things about "Medicine (医)". He has tried to implement his philosophy of medicine to set up and maturate "Japanese medicine". Hence, to dissert "Hashida as Medical Philosopher" may become a ground for argument to understand his thought as a whole from the genetic perspective on the process of thought formation of Hashida. Therefore this note can be characterized as a preliminary survey to develop the further studies on Hashida's thought.

Key words: Hashida Kunihiko 橋田邦彦, the idea on "Medicine 医", Japanese medicine, Kampo medicine